

(この場合、東部太平洋とは、ほぼ南緯45度以南を指し、種類はミナミマグロに限る)。

なお、ミナミマグロの主な分布域は、釣獲率から亜南極水の卓越する海域と推定されており、さらに、タスマン海域では亜南極水の季節的消長に伴って、魚群の南北移動がみられている。従って、もう既に指摘されているように、西風漂流の北上卓越海域が、漁場としても注目される。

現在までの調査研究によれば、マグロは概して同一海流系内を東西方向に、広範囲にわたり分布する傾向をもっている。この傾向から類推すると、ミナミマグロも南極大陸を中心とした西風漂流域を、帯状に広範囲に分布している可能性も考えられよう。

少なくとも、現在ではニュージーランド東方の西経160度からインド洋南そして大西洋域の西経10度付近までは、その分布が認められており、また最近入手した報告によると、1968年10月2日にチリ沖の南緯41度、西経81度(水温10.2°C)で漁獲されている。

たゞ、これらミナミマグロの系群が単一であるか、複数であるかによってその資源の利用に対する考え方も異なってくる。従って、今後の問題としては漁場開発と同時に、系群の調査研究があげられる。

6 感 想

山 中 一 郎 (遠洋水産研究所)

現在、マグロ漁業の国際管理は重要な段階にさしかかっている。大西洋ではマグロ資源の保存に関する条約の発効が目前にせまり、インド洋でも新しい国際委員会が発足し、ことにマグロについては大西洋と同様な条約が設けられる可能性が強い。この夏にはFAOはアメリカのマイアミで専門家会議をひらいてマグロの資源状態を検討され、この会議には遠洋水研の須田部長と私とが出席した。ここでは、いくつかの魚種について、はえなわの漁獲強度が資源に対して満限であり、資源の先行きに注意信号がでていいること、および特に大西洋のキハダでは、近年急に盛んになつた表層漁業がはえなわ漁業にどのような影響をあたえるか、資源の有効利用という面で、どちらの漁業の方が有利であるか、両方の漁業を共存させるにはどうするのがよいか等の重要な問題が提起された。これらの細部については、会議の最終報告が出されたときに、また何等かの方法でお知らせすることができると思う。

この会議に出席した機会を利用して、二三の研究所をまわり、新しい水産海洋研究の動向について簡単に視察した。人工衛星を用いて海の温度の分布や、色の分布から生産力をしらべたり、魚群や漁船の分布を知るというような試みは、すでに実施の段階にきている。また、漁船のうちの何隻かにBTを貸しついたり、さらに投棄型BTという取扱の軽便な測器を備えつけてこれにたよつて得られたデータをコンピューターで水温図に作図して無線放送をしている事業がおこなわれている。また水温のみならず、海の生産力に影響する種々の化学的成分という専門の試験船

でも非常に労力を要する調査も、新しい自動測器の開発によつて極めて容易となり、海の生産力と資源変動との関連を追及する方向に研究が向けられて来ている。このように水産海洋の研究に、電気機械工学の応用が急速に寄与して来ている。ことに先づとも話のあつた音響測器すなわち魚探を応用して海洋構造と魚群構造をつかみ、さらに魚の分布のありさま、その資源量をも知ろうとする研究も、米国、ヨーロッパでそれぞれ精力的にすすめられていて、これは国連の漁業開発計画（UNDP）や、世界の食糧需給の推定計画（IWP）にもとり入れられて実施されようとしている。遠洋水研は、新設日浅いが、すぐとなりには、水産研究所には数少ない理工系研究者を数多くもつ東海大学があるので、これと密接な協力のもとに、資源を新しい方法で観察し、新しい方法で開発の方途を目ざして研究をして行くための努力をしている。